

沖縄県立博物館新館展示工事における
伊平屋の阿母加那志人形模型衣裳の模様復元について

與那嶺 一子

Restoration of Iheya *Amoganashi* (Priestess) Costume Patterns
in the Exhibition of the New Okinawa Prefectural Museum

Ichiko YONAMINE

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第15号別刷

2022年3月31日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.15
March, 2022

沖縄県立博物館新館展示工事における 伊平屋の阿母加那志人形模型衣裳の模様復元について

與那嶺 一子¹⁾

Restoration of Iheya Amoganashi (Priestess) Costume Patterns
in the Exhibition of the New Okinawa Prefectural Museum

Ichiko YONAMINE¹⁾

1. はじめに

平成15(2003)年から再開した博物館新館建設では、視覚的効果を狙い、これまでの展示にはなかった模型を常設展示の重要なポイントに作成することになった。古我地原貝塚や進貢船、近代のサーターヤー、軽便鉄道、部門展示の生物群集、家のくらし模型など縮小したものから1対1まで、総合、部門合わせて23件を製作した。^(註1)

伊平屋の阿母加那志の模型は統一王朝の神女制度のしくみを紹介するステージに設置されている。

参考としたのは伊是名村に残る繡衣裳や道具(伊是名村指定文化財「伊平屋の阿母加那志拝領品」)、鎌倉芳太郎が残したスケッチである。

繡衣裳は後身頃や袖に欠損部分があり、繡糸は残りが少なく、課題はあったが、幸いなことに、寺田貴子氏(活水女子大学教授)の協力を得て技法の解明に至り、長崎にて繡いが行われた。刺繡された布は、伊平屋の阿母加那志の研究を続けてこられた植木ちか子氏(国際服飾学会理事)により縫製された。その経緯は既に報告されており、詳細はそれを参照いただきたい。^(註2)

刺繡技法、縫製は模型作成の課題であったが、それとは別に大きな問題がもう一つあった。繡い糸の解れている所や布の欠損部分の模様をどうするかである。

原資料の繡衣裳には模様の墨線が基布に残っており、それを辿ると模様が明らかになる。しかし、衣裳全体にひろがる欠損部分を、どのようなプロセスで決定したのか、展示工事から18年を経過し、そ

の経緯を知る者も少なくなってきたので、それを今回、記しておくことにした。

写真、作図は文末にまとめて掲載した。

(註1) 沖縄県立博物館新館は平成19(2007)年11月沖縄県立博物館・美術館と名を変え開館した。新館建設の経緯、常設展の詳細は下記資料を参照のこと。

- ・園原謙「博物館づくり ― 沖縄県立博物館新館常設展示の場合 ―」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要 第1号』沖縄県立博物館・美術館 2008年
- ・『博物館展示ガイド』沖縄県立博物館・美術館 2007年

2. 装束勉強会について

博物館の常設展示(総合展示)では、装束で表現する模型が3か所(神女と道具/位階と装束(役人の姿)/庶民のくらし(貢納布の製作風景))あった。展示内容の概要は監修者会議でまとめられていた。詳細は、展示工事で決定していくことになっていた。装束の細部検討の際に、歴史部門の展示監修委員の池宮正治氏(琉球大学教授)より、勉強会を設けて進めることが提案された。参加者は展示監修委員から池宮氏と祝嶺恭子氏(沖縄県立芸術大学教授/美術工芸分野の監修委員)、博物館の学芸員は久場政彦(民俗担当)、平川信幸(美術工芸担当)、稲福恭子(歴史担当)に、展示施工した(株)トータルメディア開発研究所から2名(野原千明・山田葉子)

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

と文化施設建設室の與那嶺が加わった。

装束勉強会は平成17(2005)年7月から12月までに7回、沖縄県立博物館の会議室にて開催されている。展示工事に付随する勉強会ではあったが監修委員には、展示監修委員会の合間を縫うように、手弁当でご参加いただいた。勉強会の内容は下記のとおりである。

〔第1回〕平成17年7月22日(金)

- ① 実施設計における展示の考え方
- ② これまでの勉強(調査)の報告

〔第2回〕平成17年8月5日(金)

- ① ハチマチ資料の所在報告
- ② ハチマチの構造
- ③ 王子冠の裂調査報告

〔第3回〕平成17年9月2日(金)

- ① 帯・足袋の実物資料の報告
- ② 絵画・写真より帯・足袋の報告
- ③ ハチマチの構造

〔第4回〕平成17年9月16日(金)

- ① 「位階と装束」ステージで想定される役人の装束案
- ② 伊平屋阿母嘉那志衣装の報告
- ③ 玉ハブル(東京国立博物館蔵)の報告

〔第5回〕平成17年10月7日(金)

- ① 「位階と装束」ステージで想定される役人の装束案について
- ② 伊平屋阿母嘉那志衣装について(地色の課題など)

〔第6回〕平成17年11月18日(金)

- ① 神女の装束について
- ② 伊平屋阿母嘉那志衣装裂の閲覧

〔第7回〕平成17年12月

- ① ドイツ・ベルリン国立民族学博物館に残る「男女ノ等級ヲ示す處ノ衣服類」

※ 上記の表記は当時のメモのままとした。

※ 氏名、肩書は勉強会開催時のものである。

伊平屋の阿母加那志については、3度議題に上がっている。

その内、第4回では模様復元について提案され、第5回では繡衣裳の地色を決定している。第6回には当館が所蔵する繡衣裳の一部と思われる裂(絹黄色地繻子に刺繡裂)を閲覧している。

繡衣裳の模様復元案は文化施設建設室から示した。その提案は勉強会です承を得たものと認識している。

当時、衣裳の全容を知るものは筆者しかおらず、写真と図面でその様子を示し、欠損部分を明らかにした。その図(図1)から、復元する全体構成がどうあるべきか検討された。それを受けて、植物文や動物文の内容や向きや形が決定されていった。

(註2) 寺田・植木「琉球神女衣装の製作について」『沖縄県博物館・美術館 博物館紀要 第2号』沖縄県立博物館・美術館 2009年

3. 伊平屋の阿母加那志繡衣裳の模様復元

繡模様の図面化に使用した写真は、平成16(2004)年3月11日(木)、山川曉氏(京都国立博物館 研究員)と筆者が撮影したものである。現在、伊是名村が所有する「伊平屋の阿母加那志拝領品」(伊是名村指定文化財/昭和52年6月27日指定)は、調査時には、旧蔵者の名嘉家に保管されていた。衣裳全体を広げた撮影は難しく部分撮影した。写真16枚をパソコンに取り込み、身頃ごとに組合せた。繡部分や墨線をたどりトレースすると写真ではよくわからなかった模様が明らかになった。しかし同時に欠損部分もかなりあることがみえてきた。

(1) 現存する繡衣裳の状態(全体)

原資料は部分的に繡糸は残るが全体的に劣化していた(写真1)。

図1、図2は作図した前身頃と後身頃、袖である。前身頃は上前身頃(左)の肩、下前身頃(右)の肩と裾から10~20cmあたり、上前の衿はなく、下前の衿、下前の胸部分に欠損がみられる。後身頃は左右いずれも背にあたる上部が欠損している。また右裾から33cmは布が無い状態である。この欠損部分は当館が収蔵する絹黄色地繻子に刺繡裂がそれになる。

袖(前身頃の左)の模様の線はよく残っているが、袖付け上部が無い。後身頃(右)は袖下一部を残して破損している。前身頃(右)の袖と前身頃は残っているが、その後は完全に失われている。また、模様がわかる部分にも大小の欠損箇所がある。

(2) 繡衣裳に表現される模様(鳳凰文・植物文)と特徴
繡衣裳に残る模様は、鳳凰文2種類と植物文6種類である(図3～10)。

鳳凰文は足を交差させ歩く鳳凰と羽を広げて飛翔する鳳凰の2種類である。鳳凰はいずれも横向きで、飛翔する鳳凰は羽から玉と思わるものを掲げている。これは類例がなく、玉が何を示しているか不明である。

植物文の特徴は後に寺田氏が「州浜文」と名付けた州浜形や流水文から植物が縦横に広がっている点である。洲浜文は半円形が連なる線で縁取られ、その内には①丸付き菱文と花、丸、②なす形に蔓のパターンがみられる。流水は三重線で表わされている。植物は6種類あるが、これも類例が無いため、それが何を表現しているのか不明である。

(3) 繡衣裳にみられる模様配置の特徴

鳳凰文と植物文の配置は次のとおりである(図11、図12)。模様はゆるやかな対称を成していることがみてとれる。

鳳凰文は後身頃の背中心や前身頃の内側に向かうように配され、身頃の脇の鳳凰は後身頃から見ると外向きだが、前身頃からは内側に向かう。袖の鳳凰は全て外向きで、左右対称を意識した構成だと言える。

植物文は大、小が組み合わされており、前身頃の左右いずれにも5種の植物文がみられ、大きさと構成はアンバランスだが、模様の種類としては対称を考えているように思える。後身頃も同様である。下前身頃の衿上部(背中心に近い部分)のみに、身頃のどこにもみられない植物文(植物紋5)が使われており、それも意図的のように思える。

(4) 欠損した繡模様の決定

繡衣裳の後身頃、両袖の上部は完全に欠損しているが、ゆるやかな左右対称を考慮しつつ、図11、12の破線部分に植物文、鳳凰文を配置することにした。欠損1には植物文3を、両袖付け位置の欠損2、3には鳳凰2を内向きではなく、袖口に向かうように配置した。袖口の欠損4、5、6には植物文1、2、4をそれぞれ置いた。欠損7は、当館所蔵品から鳳凰1であることがわかっていて、植物文とセットの

洲浜文、流水文は空間を考慮しながら組合せを決めた。植物文の向きや蔓の表現なども空間に合わせた。

上前身頃(右)の衿も欠損していたが、身頃に残る模様から衿に続く模様を想定して表現した。前身頃(右)衿上部の模様は僅かに残る部分から全体を想定して復元した。その他、経年劣化による大小複数の穴のため不明な部分も同様のルールに沿って模様を決定した(図13、14)。

全体図案の大筋は建設室でまとめたが、詳細図面は(株)トータルメディア開発研究所が整理し、刺繡製作者(寺田氏)に提供している。

繡衣裳の個々の模様には歪みがあり、それも修正すべきか勉強会以外で検討された(図15、16、17)。図16は欠損を補い、歪みを修正したものであるが、全体を考えてみた場合、歪みがあることでバランスがとれていることに気づき、原資料を生かした図案(図17)を採用した。

(5) 伊平屋の阿母加那志衣裳の刺繡及び人形模型の完成

現存する繡衣裳の地色は黄色である。『女官御双紙』(1706～1713年／仲原善忠本)には、地色は「くりな井(い)のどんす」とあり、『伊平屋島旧記集』(1726年)には「紅ノ緞子」と記されている。^(註3)赤や紅色が経年劣化で黄色に変化することは知られているが、この展示工事の段階では、非破壊調査で色材を分析することができず、地色を黄色、橙、赤にした図案を比較した結果、史料に従い「紅色」とすることが第5回装束勉強会で確認された。

(註3)・『女官御双紙 御近習方』仲原善忠文庫、N A 133(琉球大学附属図書館所蔵)／昭和13年冬、尚家本より謄写し、御評定所本写(崎原貢所蔵)より補正。

- ・『女官おさうし』伊波普猷文庫 IH082(琉球大学附属図書館所蔵) ※田島利三郎の写本
- ・「伊平屋島旧記集」『伊是名村史 中巻(島の古文書)』伊是名村 昭和63年

刺繡は寺田氏を中心に行われ、縫製は植木氏に依頼した。模型の頭髮は「王子婦人大礼服并通常服の

図」(東京国立博物館所蔵)の大礼時の髪型を参考に小波則夫氏に結いあげていただいた。模型は赤地の繡衣裳の内に黄色の胴衣、緑のカカンを着用している。胴衣、カカンの参考となる原資料は植木氏から提案され、現存する染織品をもとに製作されている。

平成 19 (2007) 年 11 月 3 日に新館は開館し、人形模型は常設展示で色衣と身に着けた神女の姿として紹介されている(写真 2)。

4. 琉球王国文化遺産集積・再興事業における模造復元

展示工事での伊平屋の阿母加那志の繡衣裳復元は期間限定のなかで実施されたため、地色や繡技法の詳細に課題が残っていた。その後、寺田氏、山田氏や筆者等の調査が続き、新たなことも分かってきた。

平成 27 (2015) 年から始まった琉球王国文化遺産集積・再興事業の模造復元のリストに「伊平屋阿母加那志の繡衣裳」として加え、本格的な模造復元に再挑戦した。製作は平成 28 (2016) 年から令和元 (2019) 年の 4 年間である。繡の委託を受けた寺田氏の調査により、これまで不明であった繡技法の全容が明らかになり、原資料により近い模造復元が可能となった。裏に糸が渡らず、表で糸が交差する技法は、寺田氏により「琉球千鳥繡」と名付けられた。博物館からの依頼により沖縄での技術者の育成にも尽力していただき、繡衣裳は、寺田氏を含め 7 名で完成した。その経緯は博物館紀要 13 号にまとめている。^(註 4)

繡衣裳の図面は、模様と配置は前回のままとし、配色などは、山田氏(現在:那覇市歴史博物館主任学芸員)が新たな調査結果をもとに修正した。また、下山進氏(デンマテリアル株式会社 色材科学研究所)による色材分析からは赤系色材はみられず黄系色材のキハダが使われていることが分かったため、その色材で黄色に染色した。縫製は屋比久珠代氏を中心とした 3 名で行われている。

(註 4) 寺田・下山・大下・與那嶺・篠原「琉球王国文化遺産集積・再興事業における琉球古刺繡の復元」『沖縄県立博物館・美術館 博物館紀要 第 13 号』沖縄県立博物館・美術館 2020 年。

5. おわりに

伊平屋の阿母加那志の繡衣裳の復元は、2 度の機会を得て少しずつ原資料の近づきつつある。繡技法は解明できたが、基布(五枚縹子)の製織、地色、復元した模様の課題はまだある。復元した模様や配置は、類例が無いため、展示工事の際に決定した模様を踏襲しているが、検討の余地はあると考えている。当館が実施した展示工事での復元、琉球王国文化遺産集積・再興事業での模造復元により周知されることで、新たな情報が得られ、3 度目の検討機会がおとずれることに期待したい。

最後に、2 度の繡衣裳の復元は、寺田氏、縫製の植木氏、山田氏の尽力無くして完成することができなかった。また、多くの皆様のご協力のもとこの事業を成し遂げることができた。記してお礼申しあげる。

〔展示工事における人形模型製作〕

基布・染色: 高橋裕博/永井織物株式会社

刺繡: 寺田貴子他

縫製: 植木ちか子

結髪: 小波則夫

人形模型・かつら・小道具: トリアド工房/太陽かつら店/スタジオ三十三

協力: 真栄平房敬/宮里朝光/高嶺久枝/高嶺美和/伊是名村教育委員会

展示工事: トータルメディア開発研究所

〔模造復元製作〕

基布・繡糸・染色: 糸のより 下村撚糸/永井織物株式会社/高橋裕博/山城有貴子

図案修正: 島袋美由紀・山田葉子

刺繡: 寺田貴子・屋比久佳代・保久智恵・知花真智子・知花加奈・幸喜明子・板橋亜弥

裏布・染色: 高岡絹織物/城間びんがた工房

縫製: 屋比久珠代・神山裕子・伊藤かおり

模造復元製作調整: 一般財団法人沖縄美ら島財団・国建株式会社共同企業体

2 度目の復元で結成された琉球古刺繡保存会の技術者には、今後、技法の習得とともに課題の解決に向けてのさらなる活動も期待したいところである。



写真 1. 絹黄色地花鳥紋様衣装（原資料／伊是名村教育委員会蔵）



写真 3. 模造復元した繡衣装（前身頃）



写真 2. 伊平屋の阿母加那志（模型）

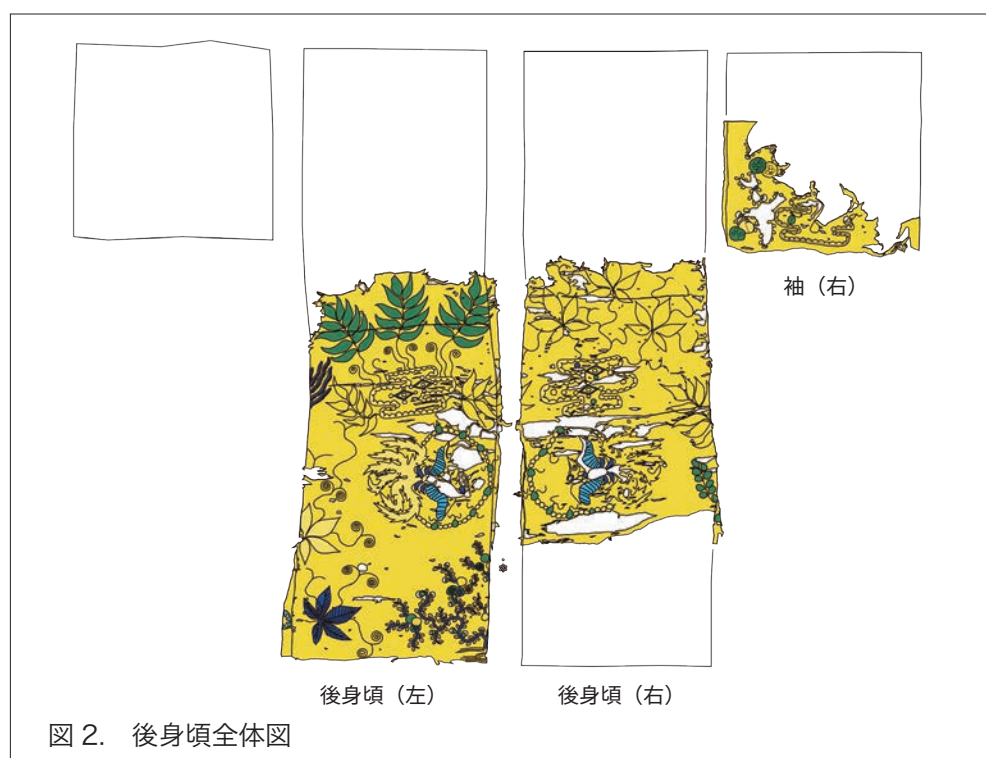




图 3. 鳳凰文 1



图 4. 鳳凰文 2



图 5. 植物文 1



图 6. 植物文 2



图 7. 植物文 3



图 8. 植物文 4



图 9. 植物文 5



图 10. 植物文 6

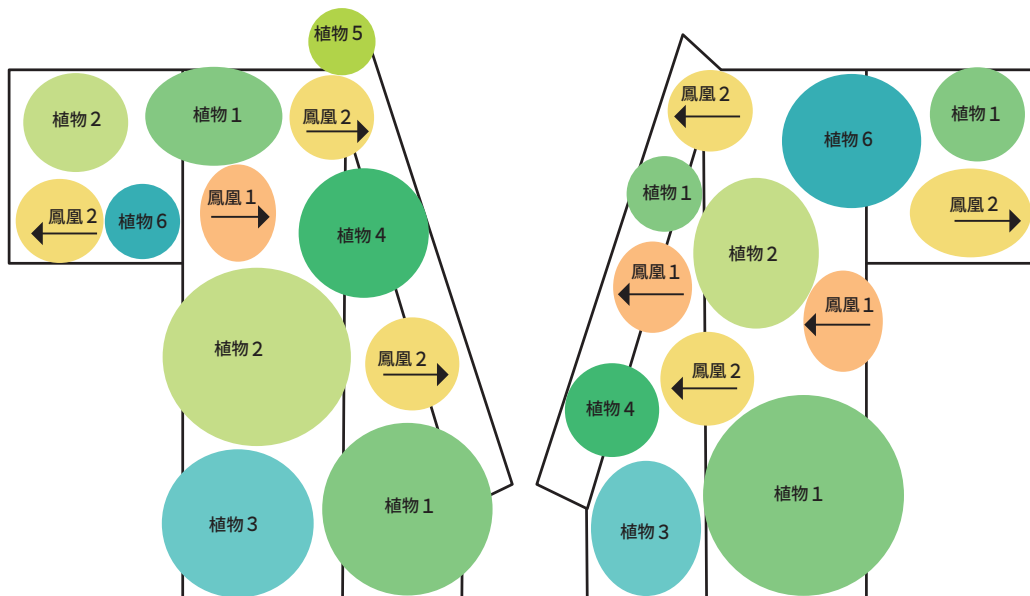


図 11. 文様配置図（前身頃）

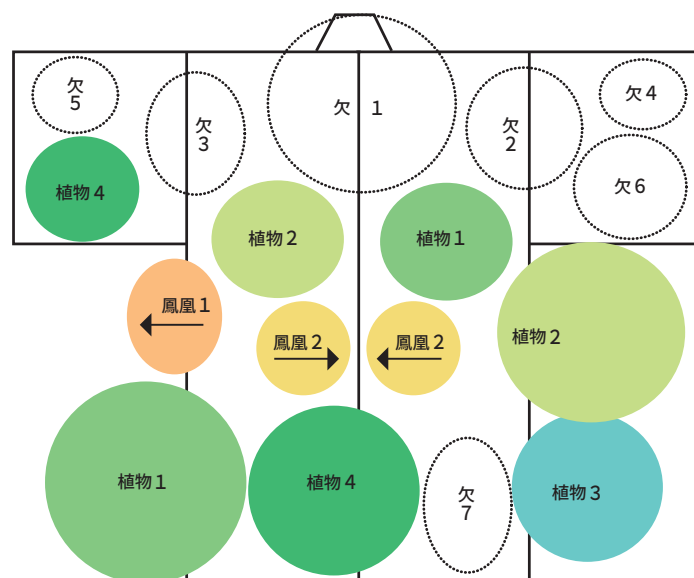


図 12. 文様配置図（後身頃）



